

Title	Le petit princeの邦訳における誤訳とその周辺：藤田訳の特徴
Sub Title	A study of Le petit prince and its translation problems : focusing on Fujita's translation
Author	葦沢, 大(Ashizawa, Dai)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2007-03
Jtitle	リサーチメモ. 翻訳論プロジェクト2006年度論文集 (A search into language and beyond : challenges in translation studies). ,p.73- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	共同研究
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0581-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Le Petit Prince の邦訳における誤訳とその周辺

— 藤田訳の特徴 —

A Study of *Le Petit Prince* and Its Translation Problems: Focusing on Fujita's Translation

葦沢 大 Masaru Ashizawa

慶應義塾大学総合政策学部 Faculty of Policy Management,
Keio University

1. はじめに

誤訳を研究することにどのような意義があるだろうか？始めに、本研究の目的は単に翻訳者の誤訳を指摘するだけで完結しない。誤訳と考えられる文章を見つけ、観察する過程を通じて、それぞれの翻訳者の文章をより深く考察・比較し、どのような翻訳が良く、どのような翻訳が誤訳となるのか、そして誤訳とはそもそも何か。このような問題意識を持って本稿に取り組む事にする。一つ加えると、翻訳とは原典となる言語から言語転換によって他言語へと変換される行為である。そこには必ず原典作品から受け継ぎ、守られるべき点と、変換過程においてそれぞれの言語の特質、代替できない部分が生まれる。矛盾するかと思えるこの双方のバランスによって翻訳は成されており、意味が完全に等価となることは不可能である。言い換えれば各言語内で存在する言葉は別の言語に翻訳する時、同じ意味の言葉と成りえないのである。しかし、完璧なる等価は目指せないにしても、言語間でイメージ・意味を近似させることは不可能ではない。完全に重なるとは言わなくても、重なる面積を多くする事によって意味が等価に近づくというイメージを考えてもらいたい。逆を言えば、必ず違う部分は存在するわけで、そのように解釈すれば誤訳も理想の翻訳も紙一重の関係であり、その違いも絶対的なものでなく、時に微々たるものであり、個々の解釈に因る点も大きいと言うことをここで述べておく。本稿では藤田尊潮氏の訳を中心に訳者の個人的な特徴を捉えつつも、翻訳にとって重要なエッセンスとなる点についての示唆も加えたい。

2. 藤田訳の分析と考察

研究手法としては、藤田訳を含め6つの邦訳、フランス語原典、3つの英文翻訳を用いて比較対象を行った。筆者の都合上、英訳と邦訳を中心に扱ったので原典への言及は少ないかもしれない。しかし英語とフランス語の言語構造の類似性を踏まえると、概念的な意味などに関して特に両者に関して大きな違いがないと考える。今回は *Le petit Prince* の中から6つの例文を取

り上げて藤田訳の翻訳の特徴、また翻訳全体を捉えた場合の重要なポイントについて触れていきたい。

2.1 特定の言葉の表現

まず、次の例を参照されたい。

(1)

[原典] C'est ainsi que j'ai abandonné, à l'âge de six ans, une magnifique carrière de peintre.
(p. 12)

[W 訳] That is why, at the age of six, I gave up what might have been a magnificent career as a painter. (p. 8)

[C 訳] So it was that, at the age of six, I gave up a wonderful career as a painter. (p. 6)

[T 訳] Thus it was that I gave up a magnificent career as a painter at the age of six. (p. 11)

[藤田訳] *そういうわけでわたしは、六さいのとき、しょうらいせいのある画家の仕事をやめてしまったというわけなんだ。(pp. 7-8)

[内藤訳] ほんとに、すばらしい仕事ですけれど、それでも、ふっつりとやめにしました。(p. 8)

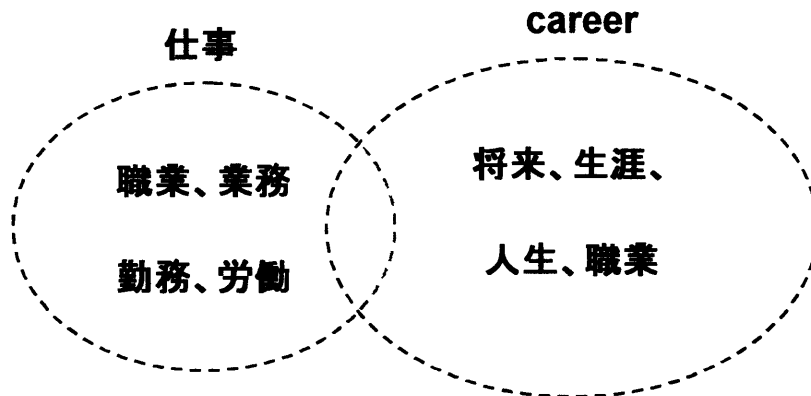
[倉橋訳] そんなわけで、私は六歳のときに絵描きになることを諦めました。(p. 8)

[池澤訳] そういうわけでぼくは、6歳のときに偉大な画家になる道をあきらめた。(p. 8)

[山崎訳] そのためわたしは、6歳のとき、画家としてのすばらしい将来を諦めました。(p. 8)

[河野訳] ……というわけで、僕は六歳にして、画家というすばらしい職業をめざすのをあきらめた。
(p. 8)

ここでは二点について詳述したい。一つは語義に関する点と、文章表現に関する点の二点である。まずは、ここで「仕事」という語を用いた点に疑問を持った。「仕事」という言葉の語意には職業や業務が含まれ、具体的な活動を指す場合が多い。一方で“career”の語意には職業の他に、生涯、道、発展など多くのイメージを付加している。藤田訳は「しょうらいせいのある」を用いる事によって「仕事」を修飾した表現になっているが、たとえ組み合わせなかった意味でも、原典・英訳の意図している意味とそぐわない。二点目は文章表現の微妙な違和感についてである。他の訳者が「諦めました」などの表現を用いているのに対し（内藤訳を除く）、藤田訳は「やめてしまった」と訳している。確かに「やめる」という表現の中には「諦める」のようなニュアンスが含まれているが、「仕事」と結びつくと些か妙な文意になる。「仕事をやめる」では現在就いている職をやめるというように受け取りかねない。ここでは、「画家になる道を諦める」のように将来の進路に関して述べているので、将来を見越した判断というニュアンスが含まれてないことから不適切な邦訳と言える。



(2)

[原典] J'avais ainsi appris une seconde chose très importante:... (p. 20)

[W 訳] I had thus learned a second fact of great importance:... (p. 18)

[C 訳] From this I learned a second fact of great importance:... (p. 14)

[T 訳] Thus I had learned a second very important thing. (p. 20)

[藤田訳] *こうしてわたしは二番目にだいじなことを知ったんだ。(p. 19)

[内藤訳] ぼくは、こうして、もう一つ、たいそうだいじなことを知りました。(p. 20)

[倉橋訳] こうして二つ目の大事なことがわかった。(p. 23)

[池澤訳] こうしてぼくは2番目の大事なことを知った。(p. 18)

[山崎訳] このようにして、わたしはとても重要なふたつめのことを知りました。(p. 16)

[河野訳] こうして僕は、とても重要なふたつ目のことを知った。(p. 21)

ここは四章冒頭の文章であるが、藤田訳だけ異なる文意として受け取られる。「二番目に」と表現する事によって「大事なこと」に順位づけを行っているように読み取ることが出来る。W 訳の “second fact of great importance” に見られるように、「大変重要な二つ目の事実」となるので英訳においても事実を知った順番の事であると解釈する事が出来る。ここでの問題は、「大事なこと」に関する順位よりも単に知った順序を示しているだけなので、大事さについての優劣は考慮していないと考えても良いだろう。

2.2 表現の簡易化・抽象化

ここで、次の例(3)を参照されたい。

(3)

[原典] Ça venait tout doucement, au hasard des réflexions. (p.23)

- [W 訳] The information would come very slowly, as it might chance to fall from his thoughts.
(p. 23)
- [C 訳] The details came very slowly, in the course of conversation. (p. 18)
- [T 訳] The information would come very slowly, following the course of the little prince's thoughts. (p. 24)
- [藤田訳] *なにか考えごとをしているうち、ぐうぜんにはほんの少しずつわかってくるのだった。
(p. 24)
- [内藤訳] *いきあたりぱったり考えているうちに、しぜん、話がわかってきたのです。 (p. 25)
- [倉橋訳] 王子さまの話を聞いているうちにだんだんとわかってきたのだ。 (p. 28)
- [池澤訳] 彼がその時々考えていることから、少しずつようすがわかった。王子さまの話を聞いて
いるうちにだんだんとわかってきたのだ。 (p. 23)
- [山崎訳] あれやこれや考えあわせてゆくうちに、だんだんわかってきたのです。 (p. 19)
- [河野訳] *王子さまがかたわらであれこれ考えるにつれて、自然と僕にもわかってきたのだ。 (p. 27)

この文章は文脈に関連する問題であるのに伴って、その語られている視点についても触れなければいけない。初めに、この文は単体だけで文意を判断出来るような部分ではないため、文章に至るまでの文脈について先に述べたいと思う。池澤訳の前文を参照すると、「一日ごとに、ぼくは王子さまの星のことや、そこを出てきた事情、それに彼の旅のことを知るようになった。」と書かれている。王子さまと語り手が実際に出会い、対話を繰り返すことによって語り手が王子さまの様々な側面について理解し、推測できるようになっている段階がこの場面である。そしてこの部分は、王子さまに関する情報がどのように語り手に露わになっていくかを表現した文章である。ここで藤田訳を見てみると、「考え事の主体が誰か」という部分と「作者はどのようにしてわかったのか」という部分が他訳者と比べて異なった表現を使っていると言える。前者については主体がはっきりしない上に、文章や文脈上からもヒントが読み取りづらい。後者においても「なにか」や「ぐうぜんに」などの言葉からは曖昧さや偶発的なニュアンスが読み取れる。しかし文脈に沿えば、個人的・内面的な思考やひらめきによって何かがわかってくるとは考えにくい。原典に“*réflexions*”や英訳に“*conversations*”と記述されていることから、内省や対話によって王子さまの素性が明らかになると考えたほうが自然であるという点も踏まえると、漠然として内面からふと思いついたという表現方法は適切でない。よって藤田訳を筆頭に、内藤・河野訳も誤訳と主張したい。

一点補足すると、私はここでの主体が誰であるかを問題意識として捉えていない。どの言語でも主語を省略することはあり得るし、文脈に沿わなければ判断が容易でない部分は必ずある。原典での主体や客体が不明確な場合、翻訳者はそれを明らかにするかしらないかは翻訳者のスタイル、文体、文脈によって左右されても問題ない。しかし、文脈に沿って読み取る技術というのは誰もが持ち合わせるべき能力であるここで述べたい。例えば、「どのようにしてわかったのか」という部分は前文の文脈をしっかりと反映した訳し方でなければ文意は大分変化してしまい、間違っ

た解釈がうまれることになる。逆に言えば、文脈をしっかりと考慮した解釈、そしてそれをある程度反映した訳し方をするのであれば、そこから先は作者の個性や読みやすさを追求する工夫を施しても問題はないと筆者は考える。

(4)

[原典] Et il me fallut un grand effort d'intelligence pour comprendre à moi seul ce problème.
(p. 24)

[W 訳] And I was obliged to make a great mental effort to solve this problem, without any assistance. (p. 24)

[C 訳] And I had to make a great mental effort to work out the problem on my own. (p.20)

[T 訳] I had to exert considerable mental effort to work the problem out for myself. (p.25)

[藤田訳] *けれども、わたしが自分ひとりでその問題を理解するには、たいへんな知恵が必要だったんだ。(p. 26)

[内藤訳] だからぼくは、うんと頭をひねって、ひとりでそのわけを考えなければなりませんでした。
(p. 26)

[倉橋訳] 私はさんざん頭を使って自分でそのわけを考えなければならなかった。(p. 30)

[池澤訳] ぼくは彼の助けを借りずにこの難問を解くために頭をひねらなければならなかった。
(p. 25)

[山崎訳] そしてわたしは、この問題を自分ひとりの力で解くために、すごく頭を使わなければならなかったのです。(p. 20)

[河野訳] おかげで僕は、ひとりでこの問題を理解しようと、いっしょうけんめい頭を使わなくてはならなかった。(pp. 28-29)

この部分においても藤田訳以外はほぼ同様な訳し方をしている。問題を理解・説くためには、特別に頭をひねらなければならないという池澤訳がここでは最も適訳かと思う。だが藤田訳ではここで「知恵が必要だった」という表現を用いることによって、主にその能力に対して焦点を当てた表現になっている。これではあたかも能力の不足によって理解できないと解釈することができ、頭の機転によるものとは受け取りづらい。（「知恵を働かせる」という表現なら自分が持ち合わせている能力を活用するという意味が含まれるので納得できるが。）

ここのポイントは王子さまと語り手が持つバオバブと言う木に対しての前提認識・経験の違いであり、絶対的な知識量が問題視されているわけではない。だから頭をひねり、自分の持っている固定観念・前提を覆せば理解できる問題なのである。よってここでの藤田訳は本来伝えるべき文意を捉え間違えてしまっているといえる。他の翻訳者のように「頭を使う」や「頭をひねる」といった慣用句的表現を使うと文全体が捉えやすくなるのだが藤田訳にはそのような工夫が見られない。慣用句はその対象言語独自の表現であるので、単純に直訳するだけでは発想が浮かび上がらない。よって訳者の作品への介入は強まるが、その分読み手にとってはわかりやすい表現

になっているのである。

2.3 文脈に沿った文章表現

以下の例(5)を参照されたい。

(5)

[原典] Et un jour il me conseilla de m'appliquer à réussir un beau dessin, pour bien faire entrer ça dans la tête des enfants de chez moi. (p. 26)

[W 訳] And one day he said to me: 'You ought to make a beautiful drawing, so that the children where you live can see exactly how all this is.' (p. 26)

[C 訳] And one day he suggested that I set about making a beautiful drawing, so as to give children on my planet a clear idea of all this. (pp. 20-22)

[T 訳] And one day he advised me to try and make a beautiful drawing so as to impress all this upon the children where I live. (p. 26)

[藤田訳] *ある日、王子さまは、がんばってバオバブのりっぱな絵を描いて、わたしの国の子どもたちがしっかりおぼえておくようにさせたほうがいいと、わたしに助言してくれた。(p. 27)

[内藤訳] ある日、王子さまは、フランスの子どもたちが、このことをよく頭にいれておくように、ふんばつして、一つ、りっぱな絵をかかないかとぼくにすすめました。(p. 28)

[倉橋訳] ある日王子さまは、私の国の子供たちに教訓となるように、ひとつがんばって立派な絵を描いてみたら、と言ってくれた。(p. 31)

[池澤訳] 別の日に彼はぼくに、きみはこの地球に住んでいる子供たちにもよくわかるような上手なバオバブの絵を描くべきだと言った。(p. 26)

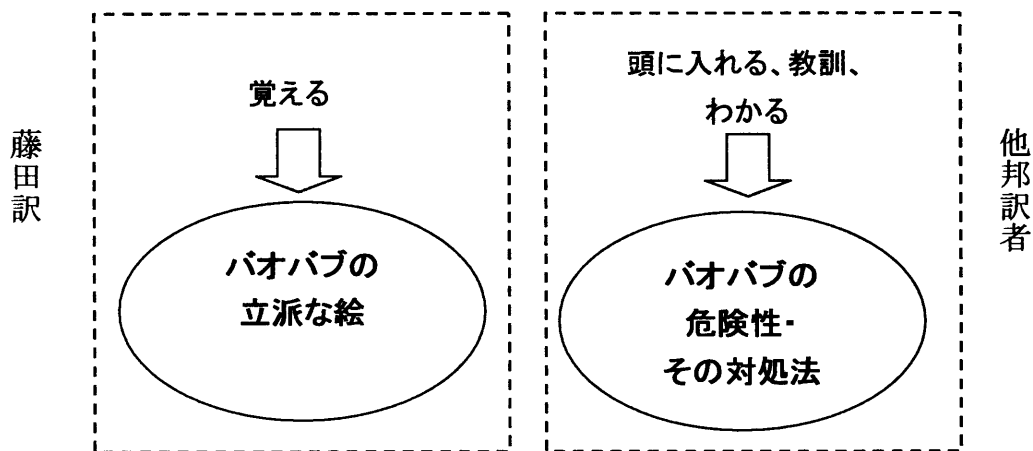
[山崎訳] そして、ある日彼は、このことをわたしの国の子どもたちにしっかりしみこませるため、りっぱな絵を1枚、精を出して描きあげるようにすすめました。(p. 22)

[河野訳] ある日、このことを僕の星、つまり地球の子どもたちも、よく頭に入れておけるように、いい絵を一枚がんばって描いておいたほうがいいと、王子さまはすすめてくれた。(p. 30)

この文章に関しては藤田訳のみ誤訳となっているように感じた。一つは全体的に間接会話文が読みにくく、下線部のように回りくどい部分が見受けられたからだ。他の訳者では「～ため、～」、「～ように、～」などと目的をきちんと示してから達成するための行為を表すが、藤田訳のみ「絵を描いて、～」と伝えなければならない大切な部分を後ろに残した表現となっている。伝えるべき点のインパクトが希薄であるといえる。よって文意的にも藤田訳だけ異なる解釈を行いかねない。他の邦訳と大きく異なる点は、バオバブの絵を描くことの効果・目的が明確に示されていないという点だ。

この文章も文脈と関連して述べられなければならない部分であって、前文に関してのポイントに言及しながら訳す必要がある。つまり、前文までの文脈ではバオバブの危険性とその対処法に

ついて王子さまが語り手に語りかけている場面であり、「このこと」(内藤、山崎、河野訳)を地球の子供達へ伝えなければいけないのである。しかし藤田訳では、「バオバブのりっぱな絵」を覚えさせるという読み方が出来てしまい、子供達へ伝えることは何かという点にまで言及していない。加えて、「覚える」という表現も、記憶する・暗記するという意味合いが感じられ、「教訓とする・わかる・しみこませる」のような表現の方がバオバブの危険性や対処法を言及する上では適当であるといえる。言葉の選び方、そして文脈から導かれる文意についての言及という両点に関して、藤田訳の文章は誤訳と言える。



(6)

- [原典] Il commença donc par les visiter pour y chercher une occupation et pour s'instruire. (p. 38)
- [W 訳] He began, therefore, by visiting them, in order to add to his knowledge. (p. 43)
- [C 訳] So he started by visiting these, to find some occupation and to educate himself. (p. 34)
- [T 訳] So he started by visiting them to look for an occupation and to add to his knowledge. (p. 42)
- [藤田訳] *王子さまはまずそれらの星をおとずれ、仕事をさがし、なにか学ぼうと考えたんだ。(p. 47)
- [内藤訳] 王子さまは、星の見物をはじめました。なにか仕事をさせてもらって、勉強しようというのでした。(p. 48)
- [倉橋訳] *そこでこれらの星の巡歴から始めた。勉強に精を出そうというのだった。(p. 53)
- [池澤訳] そこで彼はすべきことを見つけたり見聞を広めたりするために、これらの星を1つずつ訪ねてみることにした。(p. 43)
- [山崎訳] *そこで、仕事を探したり見聞をひろめたりするため、まず、これらの星を訪ねることにしました。(p. 35)
- [河野訳] *そこでそれらの星を訪ねて、仕事をさがしたり、見聞を広めたりすることにした。(p. 50)

(1)の例と指摘するポイントが類似しているが、特定の語の意味に焦点を当ててみようと思う。この部分は王子さまが自分の星から出発し、他の星へ旅立っていかうとするシーンである。何のために王子さまが星を転々と巡歴するのかという理由の部分は今後のストーリー展開にむけて重要な鍵を握るポイントの一つである。ここでの大事なポイントとは星の巡歴を始めた王子さまの目的とは見聞を広めること、世の中の知識を養うことであり、自分の仕事を探すことが最終目標ではない。仕事自体はあくまでその手段の一つにも過ぎないという捉え方である。つまり、ここでは目的が並列的な表現方法で二つ以上並ぶのではなく、どちらかを除くあるいはどちらかに強調をつけて述べることによって、王子さまの巡歴の目的が明確になる。藤田訳は並列的に配置されていることに加え、仕事から得る学びという繋がりを意識していて少し「仕事」が中心に存在しているという印象を受ける。次に(1)の例文との違いを述べると、日本語では主に一貫して用いられている言葉が、英訳において異なる表現を用いている点である。(1)では“career”、ここでは“occupation”と使い方を区別しているように思える。しかしどちらも「仕事」という言葉と（特にこの作品における文脈上）同義ではないといえる。“occupation”にも仕事という意味が含意されるが、ここではより広い意味での、物事に従事することだと考えるがほうが、王子さまの性格を考慮した場合により自然であると考えられる。他に池澤訳はこの点を的確に捉えて、注意深く訳している。

3. おわりに

藤田訳の総評と誤訳に関する考察について述べる。全体を総括して藤田訳には主に三つの特徴が見られた。一つは文体としては漢字が少なく、難解な語彙がなく、単調な文章が多いという傾向から、子供向けに作られた翻訳作品という印象を受けた。例文においてはあまり解説を行わなかったが、(3)の例文のように詳述を避ける傾向があるのはこのような要因があるからとも考えられる。二点目に、語意の変換に際して適格でない表現が目立った事が挙げられる。(1)、(2)に関してはそのような指摘を中心に記述した。意味を等価にさせることは困難であるが、的にもう少し近づかせることは可能であると思う。三点目は要所となる所で文脈に沿った翻訳に時おり難点があることである。(5)、(6)などは文脈を掴むかどうかで翻訳に大きな違いが生じてしまい、段落全体の読み取りにも影響を及ぼす。翻訳者は作品の第一読者であるということは、読者以上に文脈に気をつける必要があり、その技術も要求される。文章は連続して構成されているものであり、断続的にそれぞれの文章が成り立っているというよりは互いが連動しあっている。その一貫して連動する流れを文脈と言うのではないかと考える。よって文脈と文章は表裏一体の関係であり、そのバランスを考慮しながら翻訳を行わなければならない。

続いて誤訳の研究を行ったうえでの考察であるが、誤訳とは、単純にそうであるかないかと判断できるものではないと考える。なぜなら訳者によって構文や表出方法が違ったり、ポイントを掴んでいても何か抜けていたりなど、そこには様々な判断材料が考えられるからだ。最終的な段階では個人の解釈や価値観によって誤訳かどうかを判断してしまった事は否めない。しかし、翻訳を行う上、ひいては作品を読む上で誰にも共通して重要なポイントはあると考える。それは単

一の文章でなく、全体の流れを把握する文脈力であり、それを文章に反映させる能力である。文章は個別で存在するものでないから、その前後の文脈が揃わなければ全体を通して概観した場合、違和感が出る。今後は段落ないしは章のポイントとなる文章に着目し、それがどのように訳され、文脈に反映されているかを考察してみたいと思う。今回の誤訳研究において様々な翻訳者の立場になって考えることができ、自分も翻訳を行っている立場になることが出来たように感じた。反省点としては文章への意味に固執しすぎてしまったように感じるので、他の視点にも立って誤訳に対して考察を行いたいと思う。

【参考文献】

- 村上春樹・柴田元幸 2000. 『翻訳夜話』文藝春秋.
長島要一 2005. 『森鷗外 文化の翻訳者』岩波書店.